

牛給餌量DXで最適化

和牛繁殖・肥育の江田畜産（高原町、江田友輝社長）が、トヨタテクニカルディベロップメント（TTDC）、愛知県豊田市、ソフトバンク（東京）とともに、畜産業のデジタルトランスフォーメーション（DX）に関する実証試験を進めている。牛や餌箱を撮影した画像を人工知能（AI）

で解析して給餌量や出荷時期の最適化を目指すも、農林水産省の補助対象にも採択された。江田畜産は和牛農家4代目で、東京で食肉加工業などを営んでいた江田社長が帰郷して昨年4月に設立。成長促進剤などの飼料添加物を与えない和牛生産に取り組んでいる。その中で、長年

江田畜産（高原）



畜産業のDXに向け、柱上部などにカメラが設置された牛舎＝高原町・江田畜産

大手2社と実証 技術確立へ

の経験や感覚で餌の量や体調、肉質を見極める現在主流の生産方法に、新規参入の難しさも感じてきた。

TTDCはトヨタグループで車両開発に必要な各種データの計測や解析などを担い、畜産分野への事業展開は初めて。同じく畜産初参入で養殖漁業へのAI活用実績があるソフトバンクと肉牛生産のDXに向けた実証場所を探中、新しい手法を模索していた江田社長と出合った。

昨年11月に始まった試験では、牛舎内の柱上部などに固定カメラを複数設置して牛や飼料を撮影。画像から個体ごとの飼料摂取量や体重などを把握できる技術確立を目指す。TTDCが実証環境構築、ソフトバンクがAIによる分析、江田畜産は専門的な助言などを担う。

TTDCによると、牛の体内外にセンサーを装

着して分娩や異常行動を検出するシステムはすでにあるが、生育状況を把握できるものはないという。また画像のみで情報収集するため、機器の装着作業の負担や故障トラブルの心配もなくなる。

昨年10月に農水省のフードテックビジネス実証事業に採択され、実証費用の一部が補助されることになった。TTDC新事業創出センターの宮川倫一担当部長は「肉牛は全国で生産されており、効果が実証できれば事業の成長が見込める。2025年度中には実用化へ向けたプロトタイプを完成させたい」と話す。

輸入飼料がほとんどを占める和牛肥育で、有機無農薬の国産飼料100%を目標に掲げる江田社長。実証技術を「貴重な飼料を無駄にしないためにも必要」とした上で、「宮崎の和牛生産を支えてこられたベテラン農家の経験や技術の一部でもDXで代替できるようになれば、若い世代の参入や生産基盤の維持につながるのではないか」と期待を寄せた。（海老原斉）

【参考】

この記事は、宮崎日日新聞社に当社ホームページ上での閲覧限定の許可を得て掲載しています。転写・複写は厳禁とします。